### ユベール・スダーン モーツァルトの旅 第9回

# PROGRAM

## ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart

## 歌劇「皇帝ティートの慈悲」 K.621 序曲 (約5分)

La clemenza di Tito, K. 621: Overture

## クラリネット協奏曲 イ長調 K.622 (約30分)★

Clarinet Concerto in A major, K. 622

第1楽章 アレグロ Allegro

第2楽章 アダージォ Adagio

第3楽章 ロンド:アレグロ Rondo: Allegro

— 休 憩 (20分) — Intermission

## 行進曲 二長調 K.237 & セレナード第4番 二長調 K.203 (約45分)

March in D major, K.237 & Serenade No. 4 in D major, K. 203

- アンダンテ・マエストーソ アレグロ・アッサイ
- Andante maestoso Allegro assai
- I. アンダンテ Andante
- <sub>m</sub> メヌエット
- III. Menuetto
- Ⅳ. アレグロ Allegro

- V メヌエット
- **,** アンダンテ

Menuetto

- VI. Andante
- WI. メヌエット
  Menuetto
- Ⅷ. プレスティッシモ Prestissimo

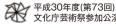
指 揮:ユベール・スダーン Hubert Soudant, Conductor

クラリネット: アレッサンドロ・カルボナーレ Alessandro Carbonare, Clarinet (★演奏曲)

管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

## 2018 **10/27**(土) 3:00PM開演 兵庫県立芸術文化センター **KOBELCO** 大ホール

beyond



主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業) 文化庁 独立行政法人 日本芸術文化振興会

公益財団法人
Affinis アフィニス文化財団



小宮 正安(ヨーロッパ文化史研究家・横浜国立大学教授

## シンプルを極める シンプルを味わう

モーツァルトは、子供にとっては易しく、大人にとっては難しい…。彼の曲をめぐって、よく言われる言葉である。

たしかに譜面を広げると単純そうに思えて、無味乾燥に弾いただけでは、モーツァルトならではの美しさが出てこない。さりとて乱暴に扱えば、独特の優美さが壊れてしまうし、お上品にやりすぎると、煌めきや生命力が消えてしまう。しかも、一聴すればさらさらと流れてゆくような曲想の中にも、実はそうとは気づかせない複雑な和声や音型が忍び込んでいるのがモーツァルトだ。

というわけで、モーツァルト作品で納得の演奏をおこなうには、シンプルに見える素材を最大限扱える極めつけの技量が必要となる。さらに本日はそんな優れた素材を、序曲、協奏曲、セレナードという3つの料理法によって味わえる贅沢さ。個々の腕前から全体のアンサンブルに至るまで、何人もの演奏家が集うオーケストラだからこそ実現可能な、千変万化の味わいを愉しみつくそう。

## 必聴POINT

ライター **おすすめ!!** 

#### 歌劇「皇帝ティートの慈悲」 K.621 序曲

#### 《心を奪う華やかな幕開け》

スダーンとPACオーケストラのコンビが、今シーズンも!モーツァルト最後の年に放たれた、輝かしさ を満面に宿した序曲が、両者のさらなるコラボレーションを祝福する。

#### クラリネット協奏曲 イ長調 K.622

#### 《名人芸が織りなす阿吽の呼吸》

名手カルボナーレを独奏者に迎えて紡ぎ出される、モーツァルト最晩年の境地とは?クラリネット独奏と 指揮者、オーケストラがいかに共振しあい、阿吽の呼吸を作り出してゆくか。一期一会の出会いに期待。

#### 行進曲 二長調 K.237 & セレナード第4番 二長調 K.203

#### 《これぞオーケストラを聴く醍醐味》

1人1人が独奏者としても優秀な才能を持つPACオーケストラのメンバーが、ある時は合奏を、ある時は独奏を務めるという贅沢な仕掛けの曲。各人のモーツァルトへの想いが、オーケストラ全体として共振する瞬間を聴き届けたい。

# PROGRAM (ヨーロッパ文化史研究家)



## 歌劇「皇帝ティートの慈悲 | K.621 序曲

初演:1791年9月6日 プラハ

## 一筋縄ではゆかない祝典序曲

『皇帝ティートの慈悲』のあらすじ。それは、古代ローマ帝国の皇帝ティートが、自分に対し て謀反を起こした人々に向き合い、彼らを全員許すという内容である。(実際のティートは、 残虐な為政者だったらしいが。)

実はモーツァルト以前にも、『皇帝ティートの慈悲』というオペラは、何人もの作曲家によっ て書かれている。というのも、その昔、オペラは力ある君主が楽しむエンタテイメントである と同時に、君主が自らの素晴らしさを人々に見せつける格好のパフォーマンスだったからだ。

モーツァルトが1791年に当オペラを手掛けたのも、ウィーンを都にヨーロッパ中に巨大 な帝国を築いていたハプスブルク家の君主が、代替わりをしたため。この君主が、ボヘミア (現在のチェコ西部)の王を兼任するべく、ボヘミアの中心地プラハで戴冠式を挙行する。 それに合わせて、モーツァルトが書いた祝典オペラこそ『皇帝ティートの慈悲』だった。

というわけでオペラの序曲も、戴冠式に臨む君主を讃えるにふさわしく、出だしから勇壮 なファンファーレで始まり、華やかな行進曲調の仕上がりとなっている。ただし、単に快活な だけの作品ではない。モーツァルトお得意のソナタ形式に基づきながら、途中でフーガ風の 曲想が顔を覗かせたり、ティートの苦しみや怒りを思わせるような激しい音楽が一瞬湧き起 こったりといった具合に、一筋縄ではゆかない隠し技が随所に秘められている。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、 弦楽5部

## クラリネット協奏曲 4長調 K 622

初演:1791年10月16日 プラハ

## 鮮烈な試みが光る辞世の曲?

オペラ『皇帝ティートの慈悲』の初演後、ほぼ1ヵ月を経て完成された作品。その後およそ 2ヵ月後にモーツァルト自身が急死したことから、彼の辞世の曲のように言われており、その 澄み切った美しさは、短すぎた人生の秋の響きを宿しているとも考えられる。

ただし、そんな感傷的な見方以外から、この作品を捉えるとどうなるだろう?

まず、クラリネットを独奏に用いるという大胆な試みである。クラリネットは元々、軍楽隊 用の楽器であって、モーツァルトの時代には進化改良の途上にあり、この協奏曲も「バヤッ ト・クラリネット という発明されたばかりの…だがその後滅んでしまった楽器のために書か れている。

そんなバヤット・クラリネットを特注で製作させ、演奏していたのが、ウィーンを中心に活 躍していた名クラリネット奏者のシュタードラー。彼はモーツァルトとも親しく、そうした経緯 からモーツァルト自身がシュタードラーのクラリネット演奏に魅了され、彼のために協奏曲を 書くてととなった。

となると、速い指使いや広音域にわたる跳躍、息の長い歌い回しといった技巧が、独奏ク ラリネットに散りばめられているのは当然だろう。しかもオーケストラが、よくありがちな独 奏楽器の「伴奏」に徹してしまうのではなく、クラリネットとの親密な「対話」をそこかしこで 繰り広げる。さらに、極限まで音を切り詰めながら、逆にきわめて豊かな音楽…例えば長調 と短調、官能性と清純さといった、本来なら対立しあう要素の触れ合いと融合…が出現す るという、モーツァルトならではの鮮烈な試み!

#### 第1楽章 アレグロ

モーツァルトの歌心が、ソナタ形式の中にあふれ出る。全曲のおよそ半分ほどを占める 長大な楽章。

#### 第2楽章

#### アダージォ

独奏クラリネットの独白に、オーケストラがそっと寄り添う緩徐楽章。

#### 第3楽章 アレグロ

楽しさと儚さが交差する中で、様々なメロディが浮かんでは消えてゆくロンド。

独奏クラリネット、フルート2、バスーン2、ホルン2、弦楽5部

## 行進曲ニ長調 & セレナード第4番

初演:1774年 ザルツブルク

## 優雅さと愉悦に満ちた「音楽」の魅力

『行進曲二長調』と『セレナード第4番』。タイトルこそ異なるため、別々の曲のようにも 思えるが、元々はセットで演奏されるために書かれたというのが定説である。つまり、まずは 行進曲が導入曲として演奏され、次にセレナーデが繰り広げられるという次第。

ちなみに『行進曲二長調』は約4~5分だが、『セレナード第4番』は演奏によっては40分 にもなろうかという大曲である。しかも、楽章同士が有機的に繋がるというよりかは、むしろ 楽章それぞれが独立しており、全部で8楽章にもなるという内容!…となると尻込みして しまいそうだが、心配はご無用である。行進曲も含め、セレナードの各楽章が、モーツァルト ならではの優雅さと愉悦とをこぼれんばかりに具えているからだ。

そもそもセレナードとは、祝いや宴の際に、屋外で演奏されるための音楽だった。なお 『セレナード第4番』は、「コロレード・セレナード」と呼ばれることもあるが、コロレードとは 当時モーツァルトが仕えていたザルツブルクの大司教の名前。かつては彼の命名祝日の ために書かれたと言われていたが、どうやら夏におこなわれるザルツブルク大学の修了式 にあたって演奏されるために作られたというのが真実のようだ。セレナードに先立って行進 曲が演奏されるのも、学生(あるいは奏者)が入場するにあたって必要という実際的な理由 からである。

つまりは学生たちの門出を記念する、華やかな祝いの曲に他ならない。文字诵り、「音」を 「楽」しみながら「音楽」に浸る時、このセレナードは最高の魅力で聴き手を魅了する。

#### 行進曲ニ長調

修了式の幕開けにふさわしく、華やかさと愉しさに溢れた1曲。

#### セレナード第4番

第1楽章 アンダンテ・マエストーソ - アレグロ・アッサイ

厳かな序奏に続き、爽やかな喜びが弾ける。

第2楽章 アンダンテ

繊細な旋律を謳い上げ、モーツァルトお得意のヴァイオリン独奏が活躍。

第3楽章 メヌエット

弦楽器のみによる楽章。トリオでもヴァイオリン独奏が出現する。

第4楽章 アレグロ

ヴァイオリンとオーケストラが華麗に掛け合い、ヴァイオリン独奏のカデンツまで付いた、 小ヴァイオリン協奏曲である。

第5楽章 メヌエット

第3楽章とは対照的な、活力に溢れたメヌエット。トリオでは、フルートとバスーンの 独奏が活躍する。

第6楽章 アンダンテ

弱音器をつけたヴァイオリンと、オーボエが美しい対話を交わす。

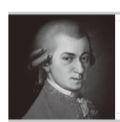
第7楽章 メヌエット

トランペットまで加わった、溌剌とした曲想が聴きどころ。

第8楽章 プレスティッシモ

宴の「お開き」に相応しい快活さが溢れ、最後は終わりそうで終わらないユーモアも。

楽器編成 フルート2、オーボエ2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、弦楽5部



「作曲家プロフィール

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791) Wolfgang Amadeus Mozart 現在はオーストリアの一部である(かつては一つの国だった)ザルツブルクに生まれる。幼い頃から 「天才少年」の触れこみでヨーロッパ中で演奏旅行をおこなうかたわら、ザルツブルクの宮廷楽団に もヴァイオリニストとして勤めるが、雇い主である大司教のコロレードと決裂。1781年以降は、オー ストリアの帝都ウィーンでフリーの音楽家として活躍する。派手な生活により借金がかさむなど経済 的には不安定だったが、夥しい数の傑作を書き続け、35歳で急死した。